

14. 病理診断報告書の確認忘れ防止の為の取り組み

病理を担当する技師が明日からできること
検査技術部

- 1) 姫路赤十字病院 検査技術部,
 - 2) 同 病理診断科, 3) 同 臨床検査科
- 永谷 たみ¹⁾ 秋久 克樹¹⁾
廣尾 嘉樹¹⁾ 井上 瞳¹⁾
春名 勝也¹⁾ 山本 繁秀¹⁾
伏見聡一郎²⁾ 堀田真智子²⁾
和仁 洋治^{1) 3)}

【はじめに】

病理診断報告書の確認忘れによる医療事故を無くすための新たな取り組みを行い、効果が得られたので報告する。

【目的】

病理診断科から報告される病理組織診断報告書、細胞診断報告書の陽性・陰性にかかわらず全例において、検査依頼から3ヶ月後に結果が閲覧されていないものを0とすることを目的とした。

【方法】

- 依頼から3ヶ月後、未閲覧の症例を抽出、リストを作成し、依頼科の部長と検査依頼医師に伝える。
- リストには、症例ごとに考えられる未閲覧要因を記載する。
- 医師に、病理診断報告書未閲覧症例の抽出、リストの作成方法を説明する。

【結果】

開始時、未閲覧件数89件（内科25、婦人科18、外科16）であった。開始後7ヶ月で未閲覧件数が0件となった。

【考察】

未閲覧症例を検索・抽出する仕組みを医師らに周知してもらうこと、病理側でも漏れがないかチェックすること、未閲覧となった要因を考察し、医師に伝えることが確認忘れ防止に重要である。

15. 当院で開始した肺癌に対するロボット支援胸腔鏡下手術（RATS）について

呼吸器外科

水谷 尚雄 田尾 裕之

当院、呼吸器外科は2019年7月から中播磨・西播磨で最初に肺癌に対するロボット支援胸腔鏡下手術（Robot-assisted thoracoscopic surgery；RATS）を導入することができた。RATSが実施できる施設が限られていることもあり、学会などでもその利点については十分論議できないのが実情である。当院のロボット手術の豊富な経験に大いに助けられながらRATSを導入するまでの過程や、通常の胸腔鏡下手術であるVATSとの違い、導入後の実際などについて報告する。

16. 1型糖尿病診療における、当院で採用しているデバイスのまとめ

小児科

○中迫 正祥 河南 幸乃
清水 彩香 藪下 広樹
仲嶋 健吾 山根 弘美
吉井 拓真 吉本 啓修
寺崎 英佑 藤原 絢子
坂田 千恵 黒川 大輔
神吉 直宙 上村 裕保
中川 卓 高見 勇一
柄川 剛 藤田 秀樹
五百蔵智明 久呉 真章

1921年にインスリンが発見され、1型糖尿病は不治の病ではなくなり、インスリン製剤やインスリン注射器や自己血糖測定機器などの医療技術が進歩した。近年においては、治療としてインスリンポンプ、血糖管理として連続グルコースモニタリングなどテクノロジーの進歩も目覚ましく、患者の選択できるデバイスの組み合わせが増えている。最新デバイスの導入された患者を診る際には、全ての医療従事者がそのデバイスを知っておく必要がある。今回、当院で採用している1型糖尿病デバイスの仕組みと

その写真，小児科フォローアップ中の1型糖尿病患児13名の選択している組み合わせ，それぞれ組み合わせによる診療報酬算定を紹介する。

17. 当科における乳児血管腫に対するプロプラノロール内服療法について

形成外科

○高田 温行 秋田美由紀
最所 裕司

乳児血管腫は，赤色または紫色調で過形成性かつ隆起性の血管性病変であり，生後1年以内に出現する。大半は自然退縮するが，視覚，気道，その他の構造が障害される場合には治療が必要である。（MSDマニュアル参照）

以前はいちご状血管腫と呼ばれていたものであり，その消退する特性から経過観察の適応とされ，また，症例によってはLASER治療が行われてきた。2016年に乳児血管腫に対してのプロプラノロール内服が承認され，3年が経過する。当院でも少数ではあるが症例を選びプロプラノロール内服療法を開始し，良好な結果を得ている。当院でのクリニカルパスを用いた内服療法と症例を報告する。

18. 大動脈人工弁破壊を来したリステリア敗血症の1例

- 1) 内科 2) 循環器内科
3) 心臓血管外科

○吉田 啓太¹⁾ 中村進一郎¹⁾
山本 岳玄¹⁾ 多田 俊史¹⁾
藤尾 栄起²⁾ 毛利 亮³⁾
森井 和彦¹⁾ 奥新 浩晃¹⁾

【症例】87歳女性【主訴】腹部膨満感【現病歴】非代償性肝硬変で近医通院中に腹水と肝の占拠性病変を指摘され，当院を受診した。【既往歴】大動脈弁狭窄症（人工弁置換術後）【経過】中等量以上の腹水を認めコントロール目的に入院し，トルバプタン内服を開始した。入院日に39度台の発熱と翌朝に血圧低下を認め，血液培養で *Listeria monocytogenes* (Lm) が検出され敗

血症と診断した。ABPC/SBT投与2日目に心雑音と喘鳴が出現した。心エコーで大動脈人工弁輪縫着部に血液の逆流を認めた。感染性心内膜炎と診断したが，Child-Pugh score 12点で手術適応なく，抗生剤加療とした。多臓器不全で入院49日目に死亡した。【考察】Lm感染のリスクに高齢，担癌状態と非代償性肝硬変がある。経口感染が疑われ，腸管から移行し人工弁に感染したと考えた。

19. 入院前転院予約システムの取り組み

地域医療連携課

細岡明喜子 河南 孝子
前田 智成 太田 加代

厚労省は「医療費適正化計画」などを打ち出し，在院日数の短縮化が促進されている。整形外科でTHA（人工股関節全置換術）とTKA（人工膝関節全置換術）のクリティカルパスを3週間から2週間に短縮するにあたり，転院患者が増える事が予測された。PFM機能を有効に活用し，入院前から転院先を決定することにより，スムーズな退院支援ができると仮説を立て取り組みを検討し，2018年11月から「入院前転院予約システム」（以下，システム）の運用を開始した。

現在18医療機関と契約を交わし，スムーズな退院調整に院内外から好評を得ている。運用開始前の地域連携・院内連携の取り組みや，運用後の効果について検証した。

今回システムの導入で，早期に調整を開始することにより，病病連携として双方の機能を活かし効率的な病床運用が可能となった。また急性期病院としての役割を明確にしつつ，患者・家族の意思決定をしっかりと支援し，チーム医療の推進，病病連携強化に貢献できている。今後更なるシステムの充実を図りたい。

20. 平均在院日数短縮に向けた取り組み

ー人工股関節全置換術のクリニカルパス改訂を通してー
看護部